

Kaleidoscope

Vol.7

“マイアミ・ヴァイス”



くろがね ゆう

イラスト：明日 蘭

テレビジョン

昔に比べたら、めっきりテレビを見なくなったと思う。仕事柄、帰る時間が遅くなるので、テレビをつける物理的な時間自体が少なくなったのだけれど。それにテレビをつけていても、見ないでBGV的に流しているだけということも多い。

見なくなったのは、だいたいドラマか映画劇場だ。特に映画劇場は、レンタル・ビデオが普及しだしてから、未公開かノー・カット、字幕スーパーでなければまず見ない。放送時間枠に収めるために、あまりにカットされていて、あらずじしかわからないからだ。

ドラマはドラマで、山田太一、倉本聰といった作家の脚本以外、見る気がしない。演出云々を言う前に、ストーリーやセリフが薄っぺらで、パターン化していて、つ

まらない。とても十分練ったものではないように思えてしまうのだ。

もちろん、これはボク個人の感じ方であって、一見薄っぺらにも思えるセリフの裏に隠されているであろう意味までくみ取らなければいけないのだろうが、どうもボクはそういうのが苦手だ。

そんなワケでテレビ番組を見なくなってしまったわけだが、テレビは良く見る。正確に言えば、レンタルでテープを借りてきて、ビデオを良く見る。

ボクにとっては、ある映画が日本未公開になったワケがわかって納得したり、逆に掘り出し物を発見したり、ずっとテレビ・ドラマより面白い。

そこで、そんな掘り出し物ビデオの中から、話題のテレフィーチャー(のちにシリーズとなったが)“マイアミ・ヴァイス”をとりあげてみよう。

ミュージック + アクション + ファッション

もうビデオで見て知ってるよ、という人も多いことと思うが、ビデオがなくて見ていないからって心配することはない。10月7日(火)夜9時から、テレビ東京系でオン・エアされる。

ちなみに、見ていない人のために解説

なんかをやると.....。

乱暴だが一言でいえば、要するにカッコイイ音楽とファッションで味付けした刑事アクション映画というところ。放映されるのがいつ頃のものになるのか不明だが、ビデオは1984年秋のパイロット版と、1985年のポール・マイケル・グレイザーが監督している“2”の2本がCICピクチャーから出ている。

不感症のボクにはどちらもストーリーがありふれていてピンと来なかったが、もちろん“マイアミ・ヴァイス”は事件の謎解きやストーリー展開の面白さを狙ったものではない。

どちらもステレオ音響で、しっかりMTVしている。放映されるときは吹き替えだろうから、おそらくステレオではなくなるだろう。ということは“マイアミ・ヴァイス”の魅力のひとつが半減してしまうことになるのだが.....。

スタさん監督の“2”がお勧め!

やっぱりパイロット版より、人気が出てから作られた“2”の「ニューヨーク・コネクション」の方がグンと面白い。

なんて言っちゃって“スタスキー & ハッチ”のスタさんことポール・マイケル・グレイザーが監督しているのだから。昔からスタさんのシューティング・ポーズはただものではないと思っていたんだけど、やっぱり彼の作った“マイアミ・ヴァイス”も、ほかの刑事物とはちょっとちがっている。

ミュージック・シーンはMTVそのものといった感じで視覚的にも楽しませてくれるし、銃撃戦もいっぱいあってスカッとさせてくれる。そして、ただ銃撃戦が多

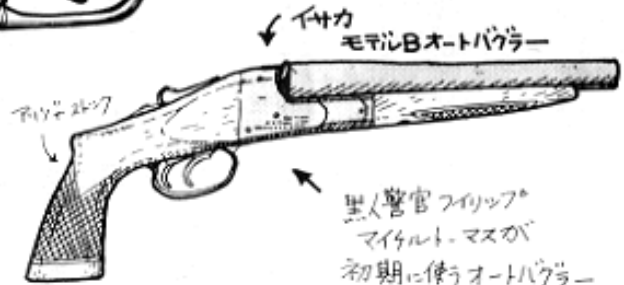


いだけではなく、出てくる銃そのものがすごいのだ。

たとえば、のっけのボゴタという国の兵士達が持っている銃は、中国製AK47コピーやG3やMP5。東西の武器が入り交じっていて、いかにも第三世界という感じが出ている。ただポリシーがなさすぎる気も少しするが。

その後、麻薬の取り引き現場を警察が押さえる場面では、実際にはありえないことだと思うけれど、警察のチーフがオール・ニッケルでスライド側面以外つや消し仕上げのマズル・ブレーキ付きGMカスタムを持っている。主役のひとりリタプスも同じようなフレーム・シルバーのGMカスタムだ。

主人公ドン・ジョンソンが使うブレンテン。エア・カシのフルコンパニオン
 本分タイミングが良かったんですねー



黒人警官フリップ・
 マイケルト・マスが
 初期に使うオートバグラー
 もとく自動車強盗が身を
 守るために売りに出された銃だが
 現在アメリカでは持てずが
 出来たイワカ製の銃
 3のです。



やはり
 マイケルト・マス
 が使うS&W
 ホッケーカード



フリップ・マイケルト・マスが後期オート
 バグラーから持ち変えて使うショットガンは
 ジム・ウイソンの息がかかっていると思えるので



ニューヨークの場面になると、主人公
 のソニー・クロケット(ドン・ジョンソン)
 は、2連マガジン・ポーチ付きサム・ブレ
 イクのアップ・サイド・ダウン・ショル

ダー・ホルスターに、ブレン・テン・カス
 タム(ブランクは軍用しかないといわれ
 る.45ACPを使えるようにしてあるらし
 い)をぶち込み、バック・アップ用として

デトニクスをアングル・ホルスターに入れているという凝り方。

とにかく、あのブレン・テンの、しかもカスタムの作動しているところが見れるんだから、興奮する。

相棒のリカルド・タブス(フィリップ・マイケル・トーマス)は、S&WのM38ボディーガードに、水平二連のソウドオフ・ショットガンから持ち替えたという設定のイサカ M37 系のポンプ・アクション・ショットガ“ベア・ストッパー”を切り詰めたカスタムを、なぜかふところから出してハデにぶっ放してくれる。

おそらくこのカスタムは、ウィルソン・アームズ・カンパニーの“エグゼティブ・プロテクション・ショットガン”をデザインした、ジム・ウィルソン社長が協力しているのだろう。棒のような折り畳み式フォア・グリップは、明らかにモスバーグ M3000 をベースにしたカスタムそのままだ。

だいたい、敵はイングラムやウージー。しかし、最後の銃撃戦では、一瞬だがウージー・ピストルが顔を出している。

それから、未確認だが、ヤクの売人の元締めが変わった銃を持っている。いろいろな人の意見を総合すると、スター M30 か M30PK、もしくは M32 のようだ。しかし、ハンマーがリング・タイプじゃないように見えるし、光沢仕上げだし、数発撃つことから考えて新製品じゃないとすれば、M28 かもしれない。とにかくビデオ・テープのステルじゃ細部がわからない。放映されたときに出てくれば、誰かが見極めてくれるだろう。楽しみだ。

アクションものとしては一級品

中途半端に開いていたドアがイングラムの連射を受けて閉まったり、弾痕がショットガンのものだと大きかったり、ブレン・テンを機関銃のように連射したり、アクション・シーンの細かいところまで気を使った演出は、スタさんならではのものだろう。

しかし、主役の2人のシューティング・スタイルが決まっているのは、なんとあのIPSCのコンバット・シューター、ジム・ズビアナが直々に教えているからなのだろう。そして、最初はSIGザウエルP220になるはずだったソニーの銃を、マイケル・マン(プロデューサー)に言ってブレン・テンに変えさせたのも彼らしい。シリーズを通してテクニカル・コンサルタントとして活躍中ということだ。

テレビ版では無理だろうが、ビデオ版はサウンド・デザインもいい。銃種によって発射音がちがうし、ちゃんと弾着音も入っている。さらに、ヘリコプターのボディに弾が当たってカンカンいう音や、カートリッジが落ちる音までステレオで再現されていて、ガン・キチにとっては、それはそれは過激なのだ。

去年のシリーズでは、ジム・ズビアナがプロの殺し屋の役で出演もしたとか。1.33秒でボディーガードの体に2発、頭に1発撃ち込んで、チェインバーをクリアにして立ち去るなんていう見せ場があるらしい。もう見るっきゃないぜ!